母性と住む

本計画は、建築における女性性の可能性を探るものである。

□シャルロット・ペリアンにみる女性性

シャルロット・ペリアンと、父としてのル・コルビュジエ

建築において活かされる女性性を考えるにあたり、ル・コルビュジエと協働した女性、シャルロット・ペリアンを参照する。
ペリアンはコルビュジエの下で、建築のインテリアや様々な家具デザインを手がけ、建築に生命を与える役割を果たした。

Charlotte Perriand

シャルロット・ペリアンは学生時代、装飾芸術を学び、サロンにおいて家具のセットを発表することで作家としての人生をスタートした。
『屋根裏のバー』で大成功をおさめたペリアンは、ル・コルビュジエの著書『建築をめざして』、『今日の装飾芸術』を読みコルビュジエの下で働くことを決意する。
建築はインテリアからエクステリアに向かって拡張していくという考え方は、コルビュジエの『建築をめざして』にも同様の記述がある。

「人間と宇宙とは密接に結ばれている。だからこそ、私の専門分野、環境の建築、建築の内装設備において。私は部分を全体から切り離すことは絶対にできない」
「建築はインテリアからエクステリアに向かって進み、両者のあいだを往復する」
「人間が幸せであるためには、建築は人間、つまり『使用者』が『自己』を自由に組み入れられる余地を残しておかねばならない。その結果が最高か最悪かは使用者に関わることだ。それを実現するためには、使用者はインテリアデザイナーの先生に助けを求めるのではなく、自分で積極的に行動しなければならない。そのとき、使用者自身がクリエイターとなる。」

シャルロット・ペリアン『シャルロット・ペリアン自伝』より

コルビュジエの理念を具現化した家具

ペリアンの家具は、位置を変えられるという意味の可動性だけでなく、家具そのものが可動性・可変性を持っていた。
それは、支持体である脚と、座面やクッションが分離しているという点で、コルビュジエが唱えた『ドミノ・システム』を家具のスケールで実現している。
「『使用者』が『自己』を自由に組み入れられる余地」を、クッションが身体に合わせてフィットすること、自由に背もたれの角度が変えられること、テーブルの長さを用途に合わせて変えられること、戸棚を可動式間仕切りとして使い、壁に代えること等で実現した。

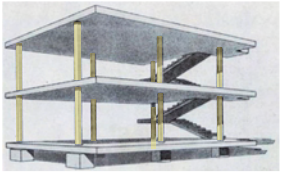
「屋根裏のバー」,1927

サロン・ドートンヌ『住宅のインテリア設備』のためのフォトモンタージュ,1929

「ドシエ・バスキュラン」,1928（左上）
「グラン・コンフォール」,1928（右上）
「シェーズ・ロング」,1928（下）

国際装飾美術博覧会『エスプリ・ヌーヴォー館』
1925

コルビュジエによる
人間の休息の姿勢のスケッチ



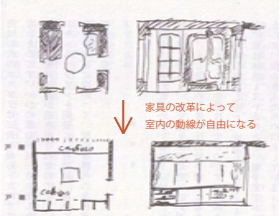
「ドミノ・システム」

Le Corbusier

ペリアンがコルビュジエのアトリエに入所する以前、ピエール・ジャンヌレとともに出展した『エスプリ・ヌーヴォー館』では、未だ木製家具を使用しており、家具の開発ではバウハウスに遅れを取っていた。

家具の改革

コルビュジエは、住宅の平面計画における改革を実行するための第一歩として、家具の改革が必要だと考えた。
家具は、社会的地位を示すための手段から、人間が仕事、食事、休息するための道具、人間の使用物を収納するための道具と意味を変えた。
彼は家具を椅子、机、戸棚（カジエ）の３種類に分類し、それに理念を反映させて実現するのをペリアンに託した。



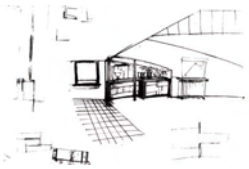
コルビュジエによる伝統的室内と現代的室内のスケッチ
1929

1929 年『芸術友の会』の講演で、家具の改革を訴えたコルビュジエは、その中で、様式即ち象徴性から脱却し、実用性・機能性へと転換するに当たっては女性の方が先行したと述べている。
髪を切り、スカートを短くし、手足の自由な服装への転換。
流行に縛られていると、現代生活を諦めなくてはならない。
女性に対して偏見を持っていたコルビュジエの意識が変わったのは、ペリアンの存在が大きいと考えられる。

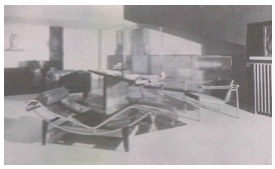
コルビュジエの建築におけるペリアンのインテリア

コルビュジエは建築内部での動線計画、即ち「動き」から設計に落としていったのに対し、ペリアンはコルビュジエの引いた動線上に、家具を配置していくことで、人が「留まる」場所をつくった。
常に使用者に対して余地を残すことを意識していたペリアンは、動かないものではっきりと境界線を引くのではなく、人が留まり、集まる場をつくり、コルビュジエの建築の内部空間を、人にとって心地よい身体スケールに近づけていった。

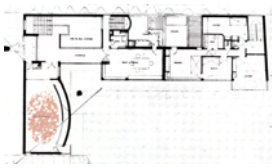
interior croquis　interior　plan　exterior　flow diagrams



「ラ・ロッシュ邸」内観スケッチ,1928

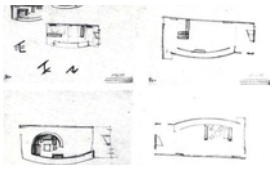


「ラ・ロッシュ邸」改修後リビングルーム,1928

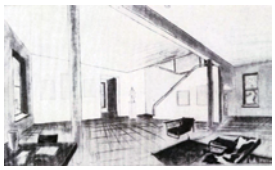


「ラ・ロッシュ邸」平面図,1928

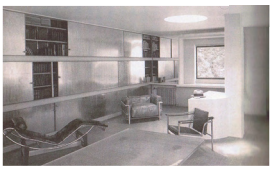
「ラ・ロッシュ邸」,1923



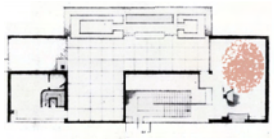
「ラ・ロッシュ邸」建築的散策路のスタディ,1923



「チャーチ邸」内観スケッチ,1928

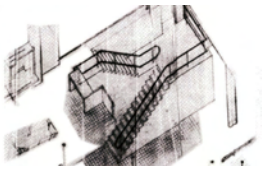


「チャーチ邸」内装,1928

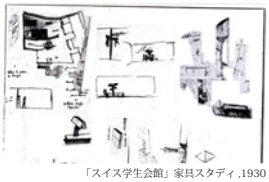


「チャーチ邸」平面図,1928

「チャーチ邸」,1928

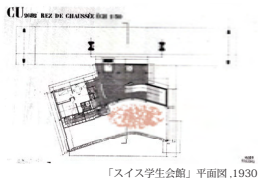


「チャーチ邸」階段スケッチ,1928



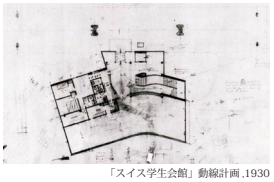
「スイス学生会館」家具スタディ,1930

「スイス学生会館」内装,1930

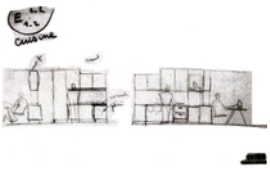


「スイス学生会館」平面図,1930

「スイス学生会館」,1930

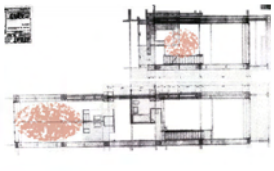


「スイス学生会館」動線計画,1930



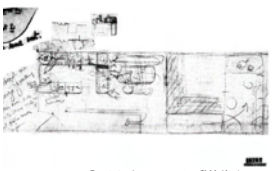
「マルセイユのユニテ」キッチンスタディ,1950

「マルセイユのユニテ」キッチン・プロトタイプ,1950



「マルセイユのユニテ」平面図,1950

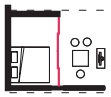
「マルセイユのユニテ」,1952



「マルセイユのユニテ」動線計画,1952

□ペリアンの余地のつくりかた、母性的なるものの抽出

ペリアンが常に意識していた、使用者が自己を組み込む「余地」は生活に多様性をもたらした。
即ち、あらゆる使用者の生活を許容していたと言える。
そこに、単なる女性的な視点あるいは生活に密着した視点を超越した、ある種の母性のようなものを見出した。

elements		特徴			応用	
ドシエ・バスキュラン		休息用　背もたれが動く	身体を支える 可動性・可変性		----------	----------
グラン・コンフォール		休息用　クッションが体にフィットする			子供部屋に クッションを敷き詰める	
シェーズ・ロング		休息用　角度が変わる			----------	----------
回転椅子		作業用　座ったまま向きが変えられる			----------	----------
伸縮可能テーブル		作業平面を伸縮させられる	空間を仕切る		----------	----------
カジエ		収納する　可動式の間仕切りになる			収納棚を間仕切として使う 回転式可動間仕切	
家具の配置		建築の内部において人がとどまる場所をつくる 目に見えない潜在的間仕切り			外部空間へ拡張 遊具・東屋の配置	
引き戸間仕切		空間の大きさを伸縮させる　open ⇔ close public ⇔ private			引き戸間仕切	
オープンキッチン		食器棚で間仕切にする　視線を遮らない 家族の空間（ダイニング、リビング）とつなぐ			オープンキッチン 目線の高さに開口を空ける	

□計画

敷地：東京都港区北青山

都営青山北町アパートの建て替え計画（20 棟）。建て替えにあたり、既存の都営住宅と保育園に加え、 SOHO や店舗、飲食店等の機能を新たに付加する。
全ての棟は、コルビュジエがペリアンに出会う前に作った標準化住宅『ペサックの集合住宅』の住居単位を参照し、基本のプランとして 3 パターンつくる。そこにペリアンの女性的・母性的要素を、機能によって段階的に加えていった。
都営住宅の住民と子供、そして新しい才能が混在する都市における集住の在り方に対する、 3 つのスケールでの女性の視点からのアプローチを試みる。

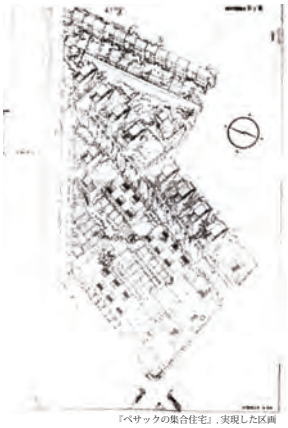
ⅰ. 一住居単位のスケール
『ペサックの集合住宅』を参照したプランに、ペリアンが行った空間を仕切る方法を用いて、居住空間を身体スケールに近づける。

ⅱ. 一棟のスケール
20 棟の内の 1 棟を母子家庭のための寮とする。キッチン、ダイニング、リビング、プレイルームを共有する。ペリアンのエレメントによる、一住居単位と一家族の 1 ： 1 の 対応関係、コルビュジエの『ペサックの集合住宅』のプランの解体。

ⅲ. 団地のスケール
ペリアンのエレメント、即ち人に「余地」を与え、人が「留まる」場所をつくる要素を、建築のインテリアから解放する。

site　S=1/6000

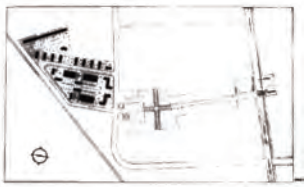
□ル・コルビュジエのペサックの集合住宅



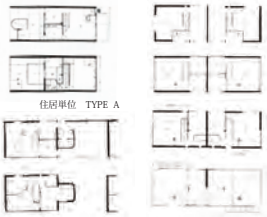
『ペサックの集合住宅』, 実現した区画

『ペサックの集合住宅』は、コルビュジエがペリアンと出会う以前の 1926 年に建てた標準化住宅。労働者のための量産住宅として計画されたが、工費がかさみ、実現したのは当初の計画より大幅に少なく、住人の入居も遅れた。量産目的の標準化住宅としては失敗と言われる。
また、住人の入居後、大がかりな改築が住人自らの手によって行われた。
フィリップ・ブードンの『ル・コルビュジエのペサック集合住宅』によると、その改築が行われた理由として、居室の大きさの問題が挙げられるようだ。
「大きい部屋は大きすぎるし、小さい部屋は小さすぎる」（フィリップ・ブードン『ル・コルビュジエのペサック集合住宅』, 住人へのインタビューより）

残存している図面にも、ペリアン入所後に比べ、インテリアのスタディが極端に少なく、まだコルビュジエ自身がインテリアや家具まであまり考慮していなかったことが窺える。



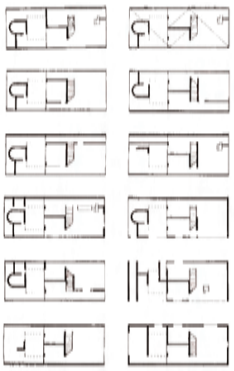
『ペサックの集合住宅』初期計画図
実現したのは左の黒塗り部分。



住居単位　TYPE A

住居単位　TYPE B

住居単位　TYPE C



実際に住人によって行われた改築の事例。
（住居単位　TYPE A）

Site Plan

0 10 30m